

による下唇欠損に対して Fusuma sliding flap 法を用いた下唇形成術で整容性と機能が改善した1例を経験したのでその概要を報告する。

#### 【症例概要】

現病歴：患者は84歳、女性。2012年に左側下唇部に腫脹を自覚したため近内科医院を受診した。ステロイド軟膏を処方され塗布するも改善が認められず、2015年近総合病院皮膚科を受診した。生検の結果、扁平上皮癌の病理組織学的診断を得たが患者の都合により放置していた。今回歯科治療を目的に近総合病院歯科を受診した際に精査加療をすすめられ、2015年11月紹介により当科初診となった。

症状および経過：初診時下唇正中やや左側にφ25mm×18mmの腫瘤を触知し、赤唇に表面粗造なφ20mmの潰瘍を認めた。また、左側頸部に複数の硬結を伴うリンパ節を触知した。初診時に画像検査と生検を行い扁平上皮癌の病理組織学的診断を得た(cT2N2bM0 Stage IV A)。2016年1月全身麻酔下での腫瘍切除術、左側前頸部郭清術、術中迅速病理組織診断を行い、Fusuma sliding flap 法による下唇形成術を行った。

【考察】本症例で Fusuma sliding flap 法が適応となった理由として、①切除範囲が赤唇の範囲内だった。②整容性にすぐれており機能的再建が可能であった。③鼻唇溝付近の皮膚に余裕があった、が挙げられる。

術後は癒痕拘縮を伴う手術侵襲により運動機能および知覚が低下した。回復するには長期間を要するため適切なリハビリテーションと定期的な経過観察が必要であると考え。本術式により鼻唇溝が浅くなったため顔貌が若々しく変化し患者の満足度が向上した。

【結語】今回われわれは84歳女性の下唇癌切除後の下唇形成術に Fusuma sliding flap 法を用い、整容性と機能が改善した1例を経験したので報告した。

#### 12) 当科における細胞診の有用性について

○浅倉 彬人, 御代田 駿, 菅野 勝也  
川原 一郎, 浜田 智弘, 金 秀樹  
高田 訓  
(奥羽大・歯・口腔外科)

【緒言】細胞診は、患者に対して外科的侵襲が少なく、安価で繰り返し検査が可能である。

今回、口腔粘膜疾患に対する細胞診検体を解析し、内訳および有用性について検討を行ったので、その概要を報告する。

【対象と方法】2013年1月～2016年3月までの39ヶ月間に当科で細胞診(浸漬固定法)を施行した176例、185検体をもとに男女比、年齢分布、実施時期、細胞診施行時の臨床診断名、細胞診の判定結果、病理組織診断との比較と正診率について検討を行った。

【結果】性別は男性78例、女性98例で女性に多く施行されていた。

年齢分布は、60歳～69歳が最も多く47検体が施行されていた。平均年齢は64.9歳であった。

実施時期は、細胞診の多くは初診時に施行されており144検体認めた。

細胞診施行時の臨床診断名は、悪性腫瘍が57検体30.8%で最も多かった。

細胞診の判定結果は、class IIの77検体が最も多くclass Vが1検体で最も少なかった。

細胞診を施行した検体のうち病理組織診を行ったものは60検体あった。

細胞診でclass IIと判定された検体の病理組織診断の結果は、上皮異形成が多く正診率は35.7%であった。

class III aの病理組織結果は、上皮異形成が多く正診率は78.9%であった。

class IIIの病理組織結果は、扁平上皮癌が多く正診率は68.8%であった。

class III bの病理組織結果は、扁平上皮癌が多く正診率は88.9%であった。

class IV及びVの病理組織結果は、いずれも扁平上皮癌であり正診率は100%であった。

細胞診の精度は、悪性腫瘍30検体の内class III a以上であったものは27検体あり感度は90.0%を示した。また悪性腫瘍30検体の内class II以下で

あったものは3検体あり疑陰性率は10.0%であった。

【まとめ】細胞診判定結果から、病理組織診断結果においての正診率はClass IIが低値であった。またClass IV及びVは高値であった。

細胞診の精度は感度が90.0%あり有用性が示唆されたが、Class II以下の診断となった症例であっても病理組織診断にて10%は悪性腫瘍を認めたことから、その扱いには十分な配慮が必要である。

【結語】今回われわれは、口腔粘膜疾患に対する細胞診検体を解析し、内訳および有用性について検討を行ったので、その概要を報告した。

### 13) 常温重合レジンの操作環境が曲げ強さと弾性係数に及ぼす影響について

○大木 達也, 齋藤 龍一, 石田 喜紀  
岡田 英俊  
(奥羽大・歯・生体材料)

【目的】主に支台歯形成後に暫間的に使用されるテンポラリークラウン (TeC) であるが、脱離や破損が起こることは少なくない。また、TeCを成形後に温水中で保管することにより、重合反応を促進させることがよく行われる。しかし、それらの手技における方法と常温重合レジンの物性について明らかにした報告は認められない。

そこで、2種の常温重合レジンについて、成形後の保管温度とその時間が曲げ強さと弾性係数に及ぼす影響を調査することで、チェアサイドでの適切な操作方法を検討した。

【材料および方法】今回使用したレジンではテンプロン (ジーシー) およびキュアグレース (トクヤマ) の2種類である。粉液比 (P/L) は2.0, 混和時間はテンプロンが30秒, キュアグレースは15秒と設定した。条件として、保管温度を37℃, 50℃および90℃と設定し、保管時間はそれぞれ1・2分とし、各条件につき2mm × 2mm × 25mmの試料を10個作製した。

作製開始から20分経過後、小型万能試験機にて支点間距離20mm, クロスヘッドスピード0.5mm/minで3点曲げ試験を行い、荷重とたわみ量を計測し、曲げ強さと弾性係数を算出した。

また、試験時の試料破断の割合を調査した。

【結果および考察】どちらの材料においても保管する温度が高くなる程、またその時間が長くなる程、曲げ強さおよび弾性係数の値は高くなった。また、試験時の破断の割合に関して、キュアグレースにおいて50℃では2分で10%, 90℃では1・2分ともに100%破断した。テンプロンにおいては50℃では2分で10%, 90℃では1・2分ともに40%が破断した。

この結果から90℃での保管条件で曲げ強さと弾性係数の値が高くなったのは、重合開始剤であるBPOの活性化温度が60℃であることから、重合度が向上したためであると考えられる。

【結論】2種の常温重合レジンにおいて、成形後に保管する温水の温度が高く、またその時間が長いほど、曲げ強さと弾性係数は大きくなることが明らかとなった。

しかし、90℃の温水で保管した試料は試験中に破断する割合が高くなったことから、レジンを高温水中で保管する場合には咬合関係の調整に留意することが必要であると示唆された。

### 14) チタン製アバットメントの変形を生じたインプラント症例

○井ノ上靖尊, 船川 竜生, 兼島 靖彦  
関根 秀志  
(奥羽大・歯・歯科補綴)

【緒言】一般にインプラント補綴装置はインプラント体, アバットメント, 上部構造の3部品にて構成されている。従来より、チタン合金製の既成アバットメントは、広く臨床応用されており高い効果が確認されている。このたび、下顎大白歯部に適用したアバットメントが暫間上部構造装着直後、チタン合金製アバットメントの変形を伴う不具合を経験したのでその概要を報告するとともに原因と再発防止策を考察した。

#### 【症例概要】

現病歴：H25年頃重度齶蝕にて下顎左側第一大臼歯を近歯科医院にて抜歯したが放置。当該歯の欠損による咀嚼困難を主訴とし精査加療を目的に当科を受診した。

症状および経過：欠損2年程度放置。欠損部陥